

尾瀬ニュース

発足一周年記念特集号

1972.8.

この一年を振り返って	2
専門報告	3
これが今後のあり方	4
活動の仕事と課題	6
活動年表	6
尾瀬の自然を守る会	7
活動報告	7
学習会	8
台風下敷	9
本部会員	10
あやめ平	11
植栽数年後も裸地は消えない	12
	13
	14
	15



あやめ平 植栽数年後も裸地は消えない

目 次

短 歌	1
この一年を振り返って	2
経過報告	3
これから会のあり方	4
尾瀬の現状と問題点	6
自動車道	6
美化対策	7
し尿処理	7
台所下水	8
木 道	8
ゴミの実態調査	8
踏み荒らしと修復	10
汚染の数字	11
私の尾瀬	12
花野絵の回想	12
最近の尾瀬	13
秘境の日の尾瀬	14
尾瀬雑感	16

柳蘭の花ふふみたる 尾瀬沼の

ひとりの丘に 吾子^あを葬る

子なきあと心の重荷 吾が背負い

今日も登るか 三平峠

平野長英

日光きすげの花のともしき夏の野に
まなことずれば 泪流るる

今日よりは尾瀬守る土となる汝^{なれ}と
心静めて遺影に向う

平野靖子



尾瀬の自然を守る運動に献身しつつ雪の三平峠にたお
れた故平野長靖氏の墓前に祈る 昭和47年8月5日

この1年を振り返って

尾瀬の自然を守る会は、この8月で丸1年を経過した。この1年間を振り返ってみると会の活動に3つの段階が見られる。

第一期活動期（46年8月～12月）

本会の発足のきっかけとなったものは故平野長靖氏の車道建設に関する新聞への投書であった。これを機会に山小屋の人びとや自然解説、清掃のアルバイトにたずさわっていた人びとにより話し合いが持たれ準備会が結成された。その間、大石前環境庁長官への陳情、長官の現地視察が行われ、長官は道路建設中止又は路線の変更をしたいとの意向を表明した。これに續いて本会発会へのアピールと署名運動が展開され、ついに8月21日発会の運びとなったのである。

発足以来、会の活動は工事進行中であった一の瀬→岩清水間の車道を中心として行われて来た。この結果、昨年11月の自然公園審議会で47年度以降の工事は中止と決定し、道路問題についてのみみれば活動は成功ということになる。しかし失敗も見のがせない。当時、道路問題に焦点を絞り、かつあまりにも急激な活動を行っていたために、他の多くの問題や会のあり方と運営について充分な話し合いがなされなかったこと。その結果、会の方向を見失ってしまったということである。このことは、ある程度止むを得なかったことではあるが、やはり恒久的な活動をしていく上に、非常に大きな弱点となってしまった。

この間、もう一つの失敗があった。話し合いの場の少なさ、更に12月の討論集会を長靖氏の急逝で失ってしまったこと、そして運営方法のまずさ等から、会に対する不満を持つ者が会員の中に出でたことである。これが後に表面化して尾瀬自然保護研究会の発足になるのだが、目的は一つなので、分裂する

ことなしに一緒に活動することを望んだのだが、残念ながらそれははたせなかった。

低迷期（46年12月～47年3月）

道路問題も一段落し、いよいよ他の多くの問題を処理しなければならない時期に来たが、今迄の話し合いの場の少なさや事務局員の減少、その他多くの条件が重なって、事務局内部でも統一した考えを持てず、会としての方向やこれから活動をはっきりとした形で打ち出せなかつた時期であった。

第二期活動期（3月～）

3月に入り総会が持たれ、会の運営の立て直しをはかるなどを当面の目標とし、その間にゴミ持帰り運動という地道なアピールを展開している。この間一の瀬→岩清水間の復元工事についての意見書作製を行い、かつ自然観察、清掃活動も行っている。これらの活動を考えた理由は、わたしたち一人一人がすぐに実行出来るということであり、このような地道な活動を行っていくことにより、より多くのハイカーに訴え、認識を深めてもらうことをまず当面の目標にしたからであった。

以上のような時期を通じて現在に至っているが、この会の果たした役割は非常に大きかったと考えられる。車道建設反対運動が全国の自然保護運動の火付け役になったことは否定できない。しかしその反面、内部的な問題を多く生んでしまったこともまた否定出来ない。

もう一つ、活動していく上に大きな問題となつたのが会と地元との対立であった。準備会の発足以前に各山小屋の人々と充分な話し合いを持たずに、活動を先行させてしまったことで、反感を持たれ、地元と共に団結して活動することが出来なかつたのも、今から考えると大きな失敗であった。

経過報告

昭和46年7月～47年8月

7月19日 尾瀬の自然を守る会準備会発足
31日 大石環境庁長官尾瀬を視察，破壊の現状を訴える

8月14日 数寄屋橋にて街頭署名運動
21日 尾瀬の自然を守る会発会式
内海広重代表を選出，後ティーチイン。署名運動や質問状の提出を決定 約200名参加

27日 昭和46年度工事の中止が閣議で了承され，復元工事に目標をしほる

28日 ニュース1号発行

29日 群馬県知事に会の趣意書を提出

9月 4日 群馬県知事に公開質問状を提出
工事即刻中止と復元工事に対する考え方を問う

11日 第2回総会
今後の問題についての話し合い

26日 全国50カ所で街頭署名及びアピール

10月 2日 73団体の協力を得て群馬県議会に8万4千余の署名簿を提出

10月2,3日 尾瀬現地集会
沼田駅一城趾公園までデモ
ゴミ持帰り運動アピール，及び活動内容についての討論



10月 9日 尾瀬の夕べ開催(高崎)
17日 討論集会，事務局の強化と活動方向，内容の検討

23日 尾瀬の夕べ開催(沼田)

28日 討論集会，運営の問題点の討議及び事務処理分担の検討，会の具体的方針については未定

11月 1日 ニュース3号発行
7日 片品村村民(主に山小屋関係)と対談

13日 尾瀬の夕べ開催(京都)

19日 自然公園審議会で尾瀬の道路計画の廃止決定

12月 1日 設立発起人の1人である平野長靖氏急逝

4日 討論集会，事務局員が故平野氏の弔問に出かけるため止むを得ず中止，当日連絡出来ず出席された方で集会，会の今後のあり方についての話し合い

23日 事務局討議，会の今後の運営についての話し合い。内海代表が辞意を表明し，会を続行させる上でも代表代行を置くことを決定当面木村憲司代行が活動を進めることを承認

27日 ニュース4号発行

2月10日 尾瀬の現状と将来を考える夕べ
故平野長靖氏追悼集会開催
尾瀬の持つ問題提起とパネルディスカッション。800名参加

3月25日 第3回総会，今後の運営について，運営委員会の設置を決定した。

4月 4日 第一回運営委員会，今後の運動の方向と具体的な活動を行う上

で会則作製の必要があると判断して、検討をすることに決定
5月24日 第二回運営委員会 尾瀬がかかえている問題の検討と活動についての話し合い
6月16日 ニュース5号発行 23~25日 現地山行ー自然観察、ゴミ持帰り運動のアピール及び清掃活動を目的として行われた
7月 5日 大石環境庁長官と復元工事に関する

する意見書と他の道路問題について会談
7日 第三回運営委員会、今後の活動及び1周年記念号の作製打合せ
15日 ニュース6号発行
22~23日 故平野氏埋葬式参列、同時にゴミ持帰り運動アピール
8月4~6日 追悼山行、及びゴミ持帰り運動アピール、自然観察

これからの方針

この1年間に行われた会の活動や方法を振り返って、からの活動はどのように行われなければならないだろうか。このような自然保護運動はより広い視野に立って行われなければならないことは言うまでもない。単に反体制的方法に始終することなく、幅広い見地に立って進まなければならない。自然を守るということには多くの意味が含まれているし、方法もいろいろある。目的は一つなのであるし、その目的につながるものであれば方法にこだわる必要はないはずである。

このような運動の方法とは別に、会員との連携も多いに必要なことである。会員を置き去りにして運動するようなことは失敗こそあれ、成功は期待出来ないだろう。会員各自の自覚はもちろんのこと、個々の力の集結こそ、大きな力を發揮でき、これ程大きなものはあり得ないだろう。また会員と事務局といった結びつきでなく、会員相互の連携を持った上で活動を行うことも重要であろう。支部を結成することはこの一つの方法であろうが、単なる義務的な集合に留まらず、恒久的にどんな小さな活動でも行っていくことができ、いざと言う時にその力を注ぎ込める組織である必要があろう。

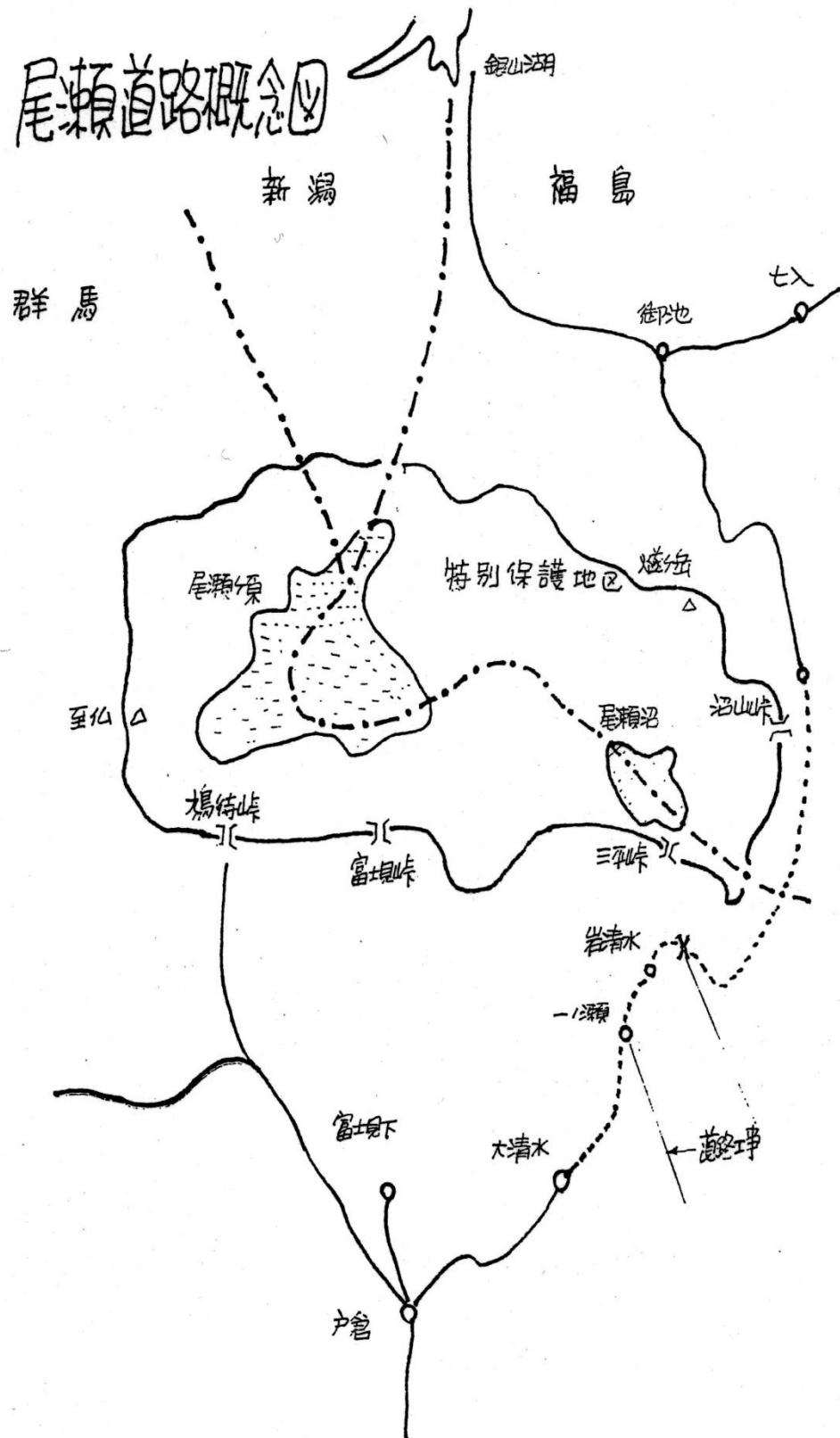
また、一人一人が自然に対する理解を持つ

ことも重要なことである。何でもよい、知つてやろう、理解してやろうという意志を持って行動することも必要なことである。

自然を理解し、一人一人の力を充分に發揮してこそ自然を守っていくことができるのではないだろうか。



尾瀬道路概念図



尾瀬の現状と問題点

自動車道

昨年問題になった三平峠下を通る道路『主要地方道・沼田一田島線』は昭和15年に策定され、尾瀬沼のほとりを通過する計画であった。その後利用者の急増を見て、公園計画の再検討が必要となり、42年に道路を含む公園計画の全面的変更が行われた。その結果、特別保護地区内は無車道地域とし、これまでの計画車道は地区外へう回させることになった。

45年8月より、群馬県は全体計画の柳沢一福島県境までのうち柳沢一三平峠下間の工事を厚生大臣の承認の下に進めたのである。

この道路は38年に群馬、福島、新潟3県が発表した『尾瀬只見国際観光ルート』の構想に基づく観光道路であることは見逃せない。

群馬県側の工事は大清水から一ノ瀬までは45年に完成、一ノ瀬と岩清水間は昨年5月の雪どけとともに始まり、登山者のオアシスとして親しまれてきた岩清水が破壊された。

福島県側は檜枝岐一七入間は従来の路線を使用、七入から御池を通って沼山口に達する路線を新設し、その後その路線を沼田一田島線に編入している。

新潟県側はことし5月から銀山平一御池間のスーパー林道が開通、現在予約制のバスがこの林道と福島県道を通って沼山峠まではいっているが、この路線利用者は今後急増の傾向にあるといえよう。

なお群馬県側の鳩待峠までは、

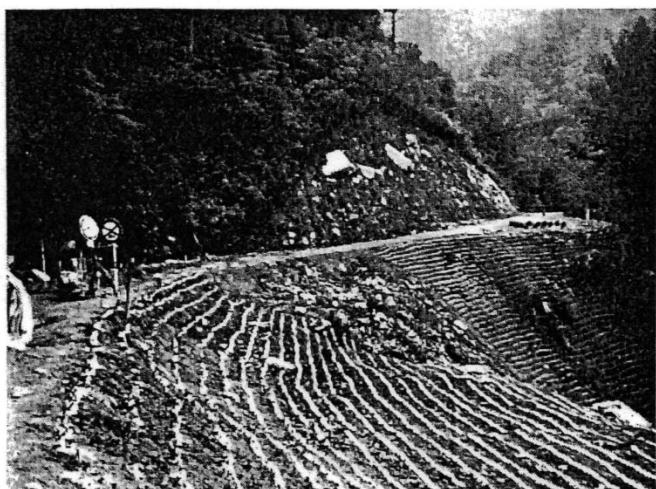
従来どおりマイクロバス、タクシー、マイカー等が入っている。

こうして車道と尾瀬のオーバー・ユースの関係は依然、解決を迫られている緊急問題であるが、保護団体等の要望もあり、環境庁と地元の県で次の対策が検討されている。

1. 御池一沼山峠間の一般車(バスその他の乗用車)の乗入れ禁止
2. 津奈木一鳩待峠間 同上
3. 現在禁止中の一ノ瀬一岩清水間の違反乗入れ防止



岩清水付近 46年10月



同上 47年8月 復元工事の芽生えがみられる

美化対策

昭和47年度の予算は片品村、檜枝岐村、環境庁、山小屋で組織している尾瀬美化愛護協会で160万、環境庁で40万、尾瀬林業で公称400万円である。この予算には施設関係は含まれていない。

この予算内で群馬県側5~6人、環境庁側4人の清掃員を雇用し、全域にわたり清掃を行っている。

これらのゴミ処理は、集団施設地区のは焼却し、他の木道脇のクズカゴ中のものは附近の湿原及び森林中に埋めている。

し尿処理

現在、特別保護地区内の施設で行なわれているし尿処理法は以下の表の通りである。同一経営のものでも建物が独立している場合は一軒とみなした。

〔問題点〕……尾瀬沼地区は殆どのものが浄化槽を使用しているが、低温のため処理効果は著しく悪く、かつ処理されたとしても栄養塩類を沼に放流しているので、問題は大き

山小屋から出るゴミは焼却している。

十字路には大型の焼却ろがあり、かなり強力に処理しているが、尾瀬沼地区のは小型で能率も落ちる。焼却に使用する燃料はヘリで運搬している。

〔問題点〕……湿原及び森林中に埋めているゴミは今後増加する一方なので、早急に他の方法に変更しなければならないだろう。また、焼却する際に出る煙、ガス等による二次汚染も考慮しなければならず、根本的対策としては特別保護地区外への搬出以外にないだろう。

い。尾瀬ヶ原地区で湿原にたれ流しをしている所があり、現に湿原中にヨシの大規模な繁殖が見られ、悪臭も漂っている。目下申請中であるが、湿原中に流出させることができれば何ら意味がない。ヨッピ川までパイプにより排出させねばならず、技術的面での問題は残る。いずれにせよ処理方法の改良ならびに運搬、排出方法を充分に考慮する必要がある。

尾瀬施設のし尿処理状況

昭和46~47年

地 区	施 設	軒数	処 理 方 法			備 考
			淨化槽	汲取→埋める	たれ流し	
尾瀬沼ビジターセンター付近	山 小 屋 キャンプ場	7 1	5	2 1		
三 平 下	山 小 屋 公衆便所	2 1	1			木 製 槽
沼 尾	休 憩 所	2		2		
十 字 路	山 小 屋 キャンプ場	6 1		5 1	1	2軒が浄化槽使用の申請中だが、処理水を湿原に流さないことという条件がついている。
山 の 鼻	山 小 屋 キャンプ場	3 1	2	1 1		1軒は工事中
温 泉 小 屋	山 小 屋 休 憩 所	3 1	2	1	1	1軒は工事中
東電、竜宮小屋	山 小 屋 公衆便所	2 2	2	1		山小屋と便所を共通のもので処理しているので数が1つ少ない。 木製槽も1つある。

台所下水

目下のところ山の鼻地区の1軒の山小屋を除いて未処理のまゝ流している。処理施設を持つ1軒の山小屋も沈殿池→簡単なろ過をして排水している程度で、沈殿物やろ過残留物の処理をどの様にするかで、効果は大きく

異ってくる。

一番問題になるのはキャンプ場で、下水の処理や森床の破壊から早急に廃止する方向に持っていく必要もある。

木道

現在使用されている材は、カラマツとアオモリトドマツが大部分である。これらの耐久年数は前者が12~3年、後者が7~8年である。47年度に行われる木道整備は群馬県側が約3km、福島県側が約2.3kmで、群馬県側はカラマツが殆どで外材を使用し、福島県側はアオモリトドマツが殆どで、外材及び国内材を使用している。これらの材の価格は、

カラマツ幅30cmの2本つなぎで1mあたり1万円以上。アオモリトドマツ幅35cmで1mあたり6千円である。

〔問題点〕……しかし現在のまゝの木道整備であると、全ての整備が完了した時点では、また他の個所の整備を始めなければならない状態になってしまう。この際出る古材の処理方法も大きな問題である。

45年度宿泊者数

尾瀬沼地区(3軒)	45,000
尾瀬ヶ原十字路(6軒)	34,000
尾瀬ヶ原山の鼻(3軒)	24,000
温泉、東電、竜宮地区(4軒)	30,000
鳩待、富士見峠地区及び	
御池(3軒)	14,000
キャンプ場利用者	

尾瀬沼	10,000
十字路	約8,000
山の鼻	5,000

合計約17万人の収容能力は1畳あたり1人として特別保護地区内2,800人、周辺地区500人となる。

空カン 25,000
空ビン 3,700

=尾瀬のゴミ実態調査=

各地の自然公園で大きな問題になっているゴミの実態調査と清掃を兼ねて、関東学生ハイキング連盟は昨年6月から7月にかけて、13大学259人を動員して尾瀬にはいった。そのレポート『国立公園清掃報告書』から拾ってみると――。

〔実態〕……至仏山頂では空カン、弁当の

箱などが目立ち、山頂にある2個のゴミ箱はあまり利用されていなかった。毎年、山頂付近に穴を掘ってゴミを処理しているが、近くできなくなるだろう。オヤマ沢田代から鳩待へ向う樹林帯の中は雪の上に空カン、空ビン、新聞紙、レモンなどがあった。1.860m地点に1m四方、深さ1mの穴を掘り紙袋5つ

埋める。

尾瀬ヶ原のゴミの量はたいしたことはなかったが、木道の途中にある休憩所や十字路、分岐などにはタバコの吸いがら、マッチの軸がやたらに目立つ。竜宮、見晴、東電小屋などの付近は焼却炉が完備されていてきれいだった。平滑の滝、三条の滝周辺はガケになっているので、たくさんのゴミがガケに沿ってうず高く捨てられていた。ゴミカゴだけでなく滝から少し離れた場所にゴミ捨て場を設けたら幾分解消されるだろう。

長沢広場にはゴミカゴ2個があったが、ササをかき分けると空カンを中心としたゴミが散乱していた。燧ヶ岳山頂付近ではハイマツの中やくぼ地に捨てられており、山頂だけでもゴミの量はカゴに150杯もあった。尾瀬沼周辺はハイカーが多くいため湿原の木道わきにはタバコの吸いがらやガムの銀紙などが目立った。木道からかなり離れた立ち入り禁止の湿原の中にも投げ捨てたと思われるゴミがあった。沼尻の小屋周辺もゴミカゴが一杯、散らかっていた。沼から大清水にかけては三平

峠や岩清水の付近や休むのに適当な場所にゴ

ミが多かった。

根名草山—加仁湯—大清水コースでは途中の鬼怒沼の木道周辺に弁当のゴミが散在、2カ所の休憩所にはカン、ビン、悪臭を発するゴミ類が当然のように山積みになっていた。

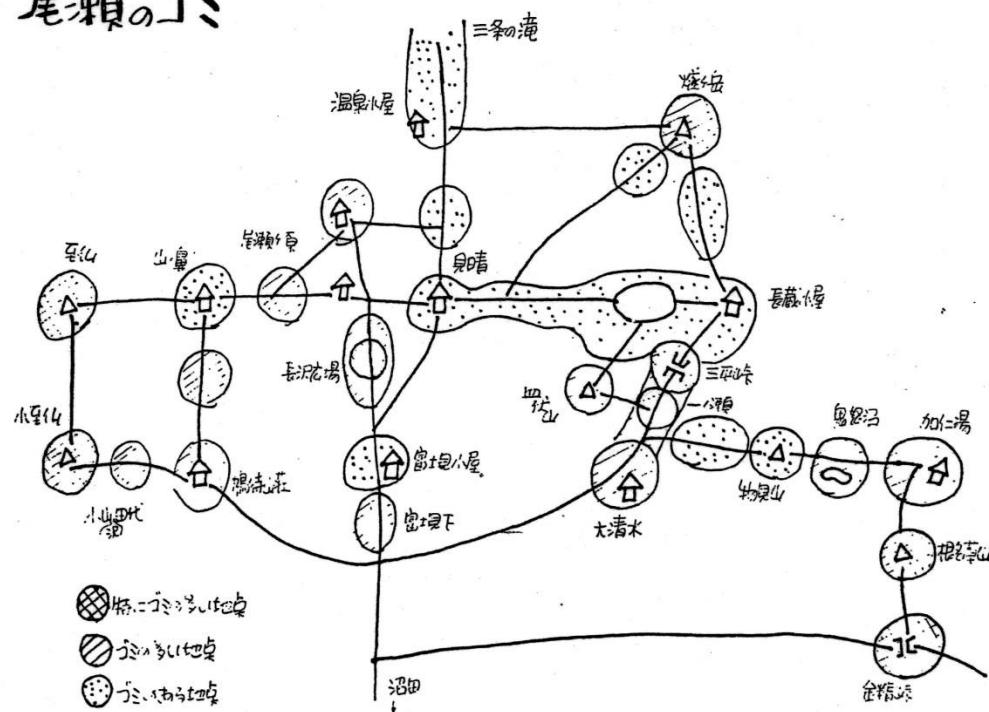
〔対策〕……連盟はこれらのゴミを埋めたり焼却処分にしたが、各コースの責任者はゴミを追放するため次のように呼びかけている。

『ハイカー自身の怠慢さ、美化意識のなさを痛感した。われわれ一人一人が自然保護・美化に心掛け、お互いに注意し合い、早く清掃合宿の必要のなくなることを祈ってやまない』

『登山者の増加につれゴミの量は倍化し、内容の変化によって残存期間が長くなる。単にゴミをカゴの中へ入れるだけでなく、持ち帰る精神の養成が必要とされる』

『最善の対策はと問われた場合は、ゴミを持ち帰れ、という。“ご苦労さん”的一声より“自然を愛する心”“ゴミを持ち帰る心”を願望する。』

尾瀬のゴミ



踏み荒らしと修復

「ひと踏み10年」と言われている。それほどではないにしても、踏み荒らされて裸地となった湿原の回復は容易なことではない。たとえ手をつくして、新たに植生を繁茂させても、原生の元のままの姿に戻ることはありえないだろう。また種子をまき、根株を植えても、成長繁茂するのに5年、10年という長い年月を要する。酸性、貧栄養、低温の湿地帯だからである。

尾瀬の湿原は昭和30年代に入ってからのハイカー急増により踏み荒らされるに至ったと言われる。最もひどいのはアヤメ平一帯で見るかけもないほどの裸地になってしまった。尾瀬カ原でも当時より山の鼻、竜宮小屋、見晴付近をはじめ諸所に裸地が散見されるに至

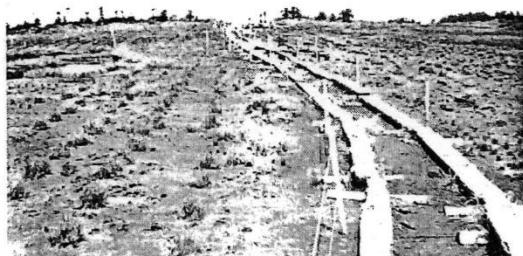
ったのであるが現在は大分復元している。

それらの裸地の修復は群馬、福島両県の文化財関係者によって昭和40年頃から行なわれてきたが、尾瀬林業観光や尾瀬美化愛護協会（環境庁駐在員、地方自治体、企業、個人などで構成）なども最近行なっている。たいへん根気のいる仕事であるが、移植と種まきの行なわれる植物はみたけすぎ、わたすげなどである。これらが活着、発芽し、年月を経て広がってくれば、次第に水分を保持するようになって、湿原状態に戻ってくるであろうと期待されているのである。

群馬、福島両県の湿原修復事業費は合せて5.000万円に達し、1m²あたり6.500円になっているとのことである。



尾瀬カ原 39年8月



アヤメ平 47年8月



アヤメ平 39年8月



アヤメ平 47年8月

汚染の 数字



環境庁は5月末、初の環境白書を発表、よ
りはてた“公害先進国日本”的姿が改めて
浮き彫りにされた。白書の中から、汚染の現
状を示す数字を拾ってみると――。

▽ 4,100億円 一般の家計も公害による
しわ寄せを受けている。40年に大阪市が行
なった大気汚染によるベンキ塗り替え、余分な
洗濯、掃除のための費用など余儀なくされ
た支出は1世帯当たり15,000円、大阪市全
体で130億円と推定される。この調査を基
に40年の全国の家計の被害額を推計すると
約2,700億円、そして45年には約4,100
億円と大きく伸びている。

▽ 1兆5,000億円 環境汚染による社会
的費用は公害の悪化とともにうなぎのぼりに
ふえている。人の健康、生命に対する被害を

金に換算するのは困難¹⁾、計量化を試みる
と、45年の被害額は農業、漁業の被害額は
約400億円、家計への被害は4,000億円、
企業の公害防止投資額が約8,000億円、政
府の公害対策費が約3,000億円で、しめて
1兆5,000億円。国民1人当たりにすると、
30年代半ばには約2,000円だったのが、
40年ごろには4,500円程度、それが最近
では約15,000円となる。

▽ 100m四方に自動車1台 エネルギー
消費料と自動車保有台数の平地面積当りの数
値をみると、1961年にフランス、64年
にはイギリス、65年には西ドイツを追い越
し、69年にはアメリカの約8倍になった。
平地で100m四方に1台以上の自動車が走
り回わっている勘定。



左――46年10月 右――47年6月

私 の 尾瀬

花野絵の回想

—尾瀬をめぐる自然と児童—

青木 照雄

空梅雨で青い空が照りつける昼下り、私は平野長靖さんの「尾瀬に死す」を読み終えてその純粹な、ひたむきな生き方に感動したぬくもりを懐に抱いて所用で外へ出かけた。途中道端で「先生」という声、それを背後に聞いて、あゝ又先生かいな、といさゝかうんざりした感情のまゝふりかえると、そこにはかつて担任した女の子の母親がよって来て、その子の近況について語ってくれた。聞くところによると、最近高校進学を控え、ヒステリックになって困っている。ごついでがあったら立寄って何か一言忠告めいたものをしてもらえないか、という立話しだった。

旬日後彼女の家を訪れた私は、多少人生の先輩としての立場からいくつかの話などを始めた。その時である。彼女は、高ぶる感情をおさえかねる様子で「私は、最近、テスト

の結果がよくないのに、Sさんなどは、私より20点も上なのに、『私はダメよ、どうしたら良くなるか教えて?』などと聞きにくるんです」というなり涙声になってしまった。

その話を聞いて私は、瞬間、これは公害だな、企業公害と同じものだ。経済発展のための現実的 requirement を錦の御旗としてロマンやセンチメンタルを一笑に付してなぎたおしていくブルドーザーのようなものだ。進学のためには、一切を無視する。それを悪いとは知りつつ見て見ぬふりをしている教育界は、毒をたれ流して目をつむっている産業界と一緒に考えてもよさそうだ。かえってこれは、目に見えない心の毒の方だから余計始末が悪いなと、思いつつも、私は、返事の代りに彼女の机の上にだまって「尾瀬に死す」を置いて立去った。



燧ヶ岳を仰ぐ
狭山市立奥富小学校6年 松本光二

話を3年前の夏にひきもどすと、私が、小学校の修学旅行として、この彼女やSを引率して尾瀬へ入った時のことであった。夜半になってすさまじい豪雨が襲い、小屋の屋根をたたき続けていたのだが果して朝になってみると、湿原の木道という木道は、一晩150ミリ降ったという雨による増水のため1mの高さにも浮上して歩行不能となり、やがて、原へ泊った登山客などは孤立状態というさわぎの中で、私は長靖さんと相談の結果予定を大幅に変更して3日間のスケジュールを消化した思い出がある。

そんな雨の尾瀬の生活の中でもこども達は、初めて接する尾瀬の美しさに心をうばわれ、小屋の窓から絵筆を走らす子、ヤナギランや

コオニユリに眼を近づけて観察する子、様々な形で自然の中にとけこんだ生活ぶりであった。

はやばやと尾瀬に秋くるナナカマド

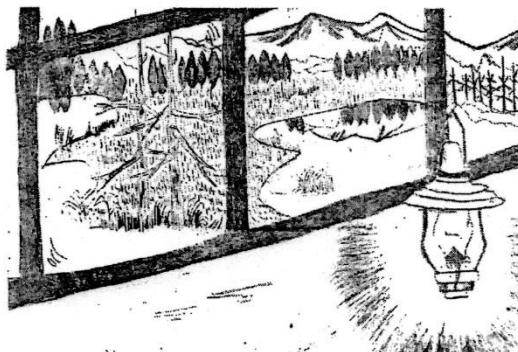
この句は、そんな時小雨を見はからって大江湿原へ行って戻って来たSのスケッチブックにしたためられた一句であった。私は、このこどもらに俳句など教えたことなどは一度もなかった。それなのにこういう詩心がすばらしい尾瀬の自然というものに接した時、眠りからさめて鮮やかな形に動き出したんだと思う。

私は、彼女の家を辞して駅までの歩道をしきりにそのことを思い出しながら、灰色の受験生活の中にいる現在のあの子らにとても、過ぐる年に学んだ尾瀬の体験が、しだいにうす汚れて行くであろうこれから的人生行路の中にはあっても、あの自然への素直な感動を思い起こしてもらいたい。そこには

きっと金銭では求め得ることのできない純粋な何かがあるはずだと思うからである。

長靖さんの遺稿集を読んで、どうか再びあの尾瀬を思い出してもらいたい。尾瀬に育ち尾瀬に生涯を閉じた一人の人間の生き方から何かをつかんでほしい。そしてそれが彼女達の清新への回帰点となってくれればと思っているのである。電車に乗ると、野面はいつしか雨となって、梅雨空に雲が烈しく去来していった。

遠き日の尾瀬とはなりし花野かな



長蔵小屋のランプ

狭山市立奥富小学校6年 後藤浩子

最近の尾瀬

やっと生きながらえている……尾瀬はそんな感じがする。道路建設の反対運動が勃発してから約一年が過ぎた。尾瀬にとっては波乱の一年であったにちがいない。道路建設があり、そして、主を失った尾瀬、遠くの東京にいる私達の耳にも尾瀬の姿は手にとるようにわかる。しかし、最近の尾瀬は道路建設中止による破壊からは免れた。とはいってもかえってそのことが宣伝となり、それになびかされて尾瀬に入る人間による破壊が激しいのが現状であろう。国立公園とはいえ、地域全体が特別天然記念物であり、繊細な自然の宝庫である尾瀬は人間が一定数以上入山すれば、そのメカニズムは当然狂ってくる。

高校生自然保護の会

片山祥子

自然保護の立場からすれば、入山制限をして自然のサイクルを保たなければならない。しかし、それを実施するためには、あまりにも弊害が多いすぎる。

最近の尾瀬は日本中で一番人々から暖かい目で見守られているのではないだろうか。（その基準は常識はそれに低いが）尾瀬は現在の自然保護運動の火元であり、モデルケースであり、そして憲章が最初にできたところである。保護運動も、以前に例のない充実したものになり、結果も例のない車道建設中止である。これほどまでに騒がれ、保護されたところはないであろう。

保護されたといってもその基準は前記のよ

うに常識はずれに低いが、あえてここで述べたいことは、富士スバルラインのように、一本の道路をひきっぱなしにされて、年に何万本の大木が枯れ、それを野放しにされている所よりは、今の尾瀬は保護が必要だ…と前向きの姿勢が、少しでも世間一般にあるだけで

も良いではないかということである。

尾瀬はまた今年も水芭蕉の季節を終え、今はニッコウキスゲの橙の絨毯をしいていることであろう。私達は今、この自然の偉大な力に逆らわずそっとしていることが今まで人間がしてきた自然への償いではないだろうか。

秘境の日の尾瀬

松田 美代子

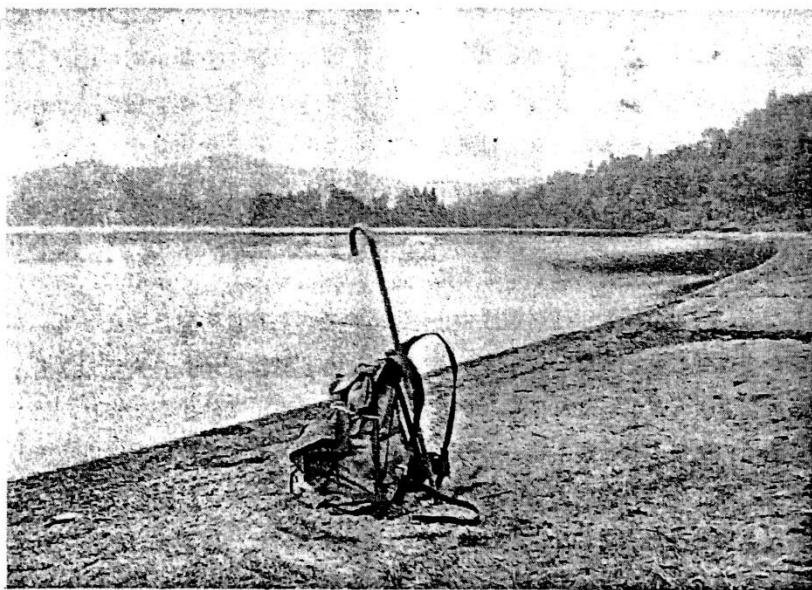
私の若い頃、尾瀬はまだあまり一般の人間に知られていなかった。尾瀬は下界を離れた天国のように美しいところと伝えられ、何とかして行ってみたいと思いはじめた。

当時はまだバスが鎌田までしか入らず、秘境中の秘境だった。幸い昭和16年にバスが戸倉まで開通したので、心が勇んだけれど、山に入る参考書もなく、唯一の手がかりとして、東京三宅坂の陸軍参謀本部で買った地図を並べて、赤線を引いて研究した。三日間の行程で400~50K、それに足場も非常に悪いというので、大先輩の河田楨先生に、山の様子、花の種類、その花期などを詳しくお聞きして、先生の著書まで頂き、勉強してから出かけた。

戸倉からのアプローチは長かった。その年

から泊らなくてすむようになった大清水小屋は閉ざされたままになっていた。三平峠を下りはじめると急に樹木が切れて空がひらけ、サッアイヤのように碧く光った沼が私の目に飛び込んだ。あたりの樹木は若木で今より明るかった。今でさえ、何回峠を越えても、沼の見えるところまで来ると、尾瀬へ来たという実感がこみあげて来るのだから、生れて初めて見た尾瀬沼の印象は、とても忘れられない。私達三人のパーティは夢中で沼畔へかけ降りた。

私達を迎えたその沼は、真白い砂の広々とした海岸の浜辺のような不思議な景色で、山の中とは思えなかった。「檜の突出し」がかすみ、対岸の檜が墨絵のように浮び、いつのまにか、私達は幻想的な気持に酔っていた。



当時の尾瀬沼 白い砂浜が広くつづいていた

その美しい白砂は石英の粉ではないかと思われるけれど、私には学問的なことは解らない。が、どんなに美しい海岸でも、あのようなすばらしい砂は他所で見たことがない。その美しい砂は広い浜辺をつくり、透明な沼底に続いていた。そして静かな波がビシャリと音を立てて波打際を返していた。

三平下から長蔵小屋までの道は、沼のほとりで、ニッコウキスゲとトクサに囲まれた道だったが、今は沼の中になってしまった。はじめて見たニッコウキスゲもしづみかけるほどの夕暮に、やっと第一日目の長蔵小屋に辿りつき、石油ランプの灯った部屋の高窓から裏山を眺めたり、下駄を借りて暮れゆく沼を惜しむように見守ったりした。

二日目に尾瀬ヶ原に入る。夢かと思うほどのお花畠が続いている。念願の原は一筋に草の中を人が辿った踏跡が道であり、やっと一人歩ける程度に細く、この道を通った誰もが草や花をいたわりながら歩いていたことがうかがわれる。山ノ鼻に続く一本の細い草道は

ジクジクとスポンジのように、踏むと澄んだ水が靴にかぶさる。ゴムのように弾力があり、ブカブカと響く。今では考えられないことだけれど、ステッキを竿にすれば、浮島に乗って動かせるという話を聞いた。

河田先生から特に注意されていた牛首の所まで来ると、コケがなくなつて、一歩一歩ヒザ上まで泥沼にもぐり、足がぬけなくて重心を失い、何回も転びそうになった。尾瀬一番の難関だった。私と妹はキュロットスカートだったので助かったが、リーダーのズボンは台無しだ。山ノ鼻小屋はお婆さんと孫の坊やの二人暮らしと聞いていた。日が暮れて遠くから小屋の灯を見た時は助かったという気がした。小屋のお婆さんは「遭難しなくて良かった。女人がよくここまで入って来られましたね」と珍しがるようにいった。

小屋のいろいろは電信柱ほどの太さの材木が1m位の長さのまま一本突込んであり、その先がブスブス燃えていた。お膳のない食事で旅人はいろいろを囲み、大鍋から勝手によそっ



山の鼻小屋の入口で

て、食べたいだけ食べた。翌朝コケモモの実の塩漬を御馳走になった。この小屋のお風呂は庭先に風呂桶が置かれてあるだけで、至仏や月を仰ぎながら、下駄ばきのまま体を洗はなければならない風流さだった。

トイレも傑作だった。物置のような建物の戸を開けると、6畳位の板張りの床に適当な間隔をおいて、キンカクシが5~6個並んでいた。仲良くいっぺんに用が足せるように造られていた。戸口に番人を置いて入っても、ど

の辺にしゃがもうかととまどい、落着かない。三日間歩き通して、どこまでも見渡せる原だったのに、一人の影すら見当らなかった。戸倉の近くまで来て僅かな畠を見たとき、人里が近くなったという安心感がわいたほど、人が恋しかった。二日目のお花畠は雨に煙っていたけれど、その日の喜びを一生忘れるこ

とは出来ない。夫の死後私の人生はオゼキチになってしまった。尾瀬は一般化され、年月とともに原が傷ついていくのも悲しいけれど、それより前に、メルヘンの里の白砂が人の手によって堀り去られたということは、もっと悲しみ憎むべきことだと思う。

尾瀬雑感

5月20日朝、ひさしぶりに尾瀬沼のほとりに立つ。僕が尾瀬を訪ねるのはこれで4回目、来るたびに回りの様子が変っている。今回の入山コースは大清水→三平峠コース。このコースは過去三回の尾瀬歩きの入山か下山の時いつも通る道である。

僕が始めて尾瀬を歩いたのは、5年前の林間学校の時だった。その時は岩清水もまだ枯れておらず、車道もゆっくりしたペースで一ノ瀬の下あたりまでしか来ていなかった。僕は友人とふざけながら旧道を歩き、一ノ瀬の川原で足を洗ったものである。

2年前の初夏、ミズバショウを見に尾瀬を訪ねた。その時は鳩待峠から入り、下山コースに三平峠→大清水をとり、一ノ瀬から大清水まで車道を歩かされた。

去年の10月「尾瀬の自然を守る会」の尾瀬集会に同行し、岩清水より工事中の車道を歩く。まったくひどい。これが尾瀬につづく道かとあきれる。山道とはぜったいこんなものではないと友人と憤慨した。

そして今回の尾瀬ではあるが、今回は過去のいずれの尾瀬歩きともおもむきが違っている。とにかく午前9時ビジターセンター前に集合、仕事開始だ。そう、今回の尾瀬山行は、カッコイイ言葉でいうと勤労奉仕、早くいえば土方、木道運びなのである。とにかく木道は重い。運ぶ距離は約1キロ。回りの人は何をやっているのかといわんばかりにジロジ

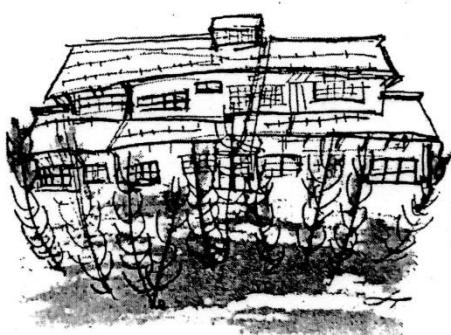
東京農業大学農学科1年

須田 哲

口見ているし、本当にバテた。

なぜこんなことをやるのだろうか。それは今年から尾瀬沼の舟が使われなくなったからだ。今まで舟で沼を渡っていた人がすべて沼の回りを歩く。そこで木道を整備するのである。

去年の夏からの動きで車道工事中止がきました。しかしそれでも尾瀬は徐々に荒されていくだろう。毎年1年間に尾瀬を訪ねる人は長蔵小屋だけで2万人だといわれている。それがミズバショウとニッコウキスゲの時期に集中するのである。そして今年は、去年から話題にのぼったため例年よりも、もっと尾瀬を訪ねる人が多くなるだろう。それにともなってゴミもふえてくる。人の数とゴミ、これが今の尾瀬、いや日本中の自然公園の最大の問題であろう。とにかく今の尾瀬はパンク寸前なのである。



投稿歓迎

会員の皆さん、本会発展のために、下記について積極的に投稿してくださることをお願いします。短かいものでもけっこうです。

- 本会の組織、運営、事業、運動方向等についてのご意見、注文
自然保護運動・市民運動についてのお考え、他団体の活動内容や運動の体験談等
- 紀行文、回想録、写真、スケッチ、詩、短歌等
- 観察記録、調査研究レポート、参考資料
- 尾瀬の楽しみ方、味わい方
- 尾瀬周辺の自然と生活環境
- 尾瀬に関係のあるニュース

編集後記

守る会1周年の記念と総会のためにこの特集号をつくりました。会員の有志で編集委員を構成したのですが、慣れない仕事なので手間どりました。会員諸氏の投稿をニュースで呼びかけたのですが、集まり方が少なかったのは残念でした。何事もそうですが、だれかがやるだろうと思っていては事態の解決にはならないので、きょう自分は何ができるかを考え、実行に移すことが大切ではないでしょうか。

尾瀬ニュース 1972年8月30日 発行

= 発足一周年記念 特集号 =

編集発行 尾瀬の自然を守る会

東京都港区三田1-11-45-108

大田気付

〒108 Tel (03) 451-3883